

「新しい東北」官民連携推進協議会

令和元年度 福島県意見交換会（第2回） 議事概要

令和元年9月10日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和元年9月10日（火）10:00～12:00

【場 所】復興庁福島復興局 7階 多目的会議室

【出席者】

<副代表団体>（順不同）

株式会社東邦銀行、福島県、国立学校法人福島大学、

一般社団法人ふくしま連携復興センター、復興庁総合政策班、復興庁福島復興局

<連携対象団体>

特定非営利活動法人コースター

<オブザーバー>

公益財団法人福島県観光物産交流協会

<事務局>

PwC コンサルティング合同会社

【議事概要】

1 開会

1.1 参加者自己紹介

各出席者がそれぞれ挨拶を行った。復興庁総合政策班より、各団体の活動状況の共有や連携のきっかけとなる場づくりをしていきたいという話があった。

2 各団体の取組紹介

各参加団体より、取組紹介資料（資料2-1以降）をもとに取組を紹介した。

3 今年度の意見交換会の説明

事務局より、事務局提出資料（資料1）をもとに以下の点を説明した。

- ① 目的・今年度の方向性
- ② 過去2年間の経緯
- ③ 今年度の進め方
- ④ 「実践の場」について
- ⑤ 第1回意見交換会・事後調整の結果
- ⑥ 第2回意見交換会の検討事項

4 連携対象団体からの情報共有

NPO法人コースターより、学生の現状やニーズが共有された。コースターは福島で働く人を増やすこと、そのための環境基盤を整備することを目的として活動しており、学生向けの取組として復興庁の復興・創生インターン事業のコーディネーターとして郡山周辺地域を担当している。

活動の中で見えてきた学生の現状として、震災をきっかけとして福島に対してアイデンティティを持ち、地域のために何かをしたいという意識が向上しているが、県内に希望する仕事がなく、県外企業に就職するという状況がある。他方で、探求学習と呼ばれるキャリアに関する内容や地域との協働について学習する新規カリキュラムの創設や、大学受験形態の変化にともなうボランティアなど校外活動実績の重視といった周辺環境の変化により、仕事について理解・体験する機会は増加しているものの、県外就職後に仕事観と現実の環境とのミスマッチにより辞めて地元に戻っているという現状がある。これらを踏まえ、地域の企業が仕事の内容、その中の創意工夫・やりがい・夢をいかにして見せられるか、また学生が単に話を聞くだけでなくインタビューなどを通じ、冊子にまとめるなど能動的に取り組み、理解を深めると共に情報発信を継続的に行うことが重要ではないか、という意見が挙がった。

5 意見交換

5.1 実践の場の詳細検討

企業にどういった仕事があるのかを知りたい、企業とのミスマッチを防ぎたいといった学生に対し、ライフヒストリーに魅力があり学生でも分かりやすい実績を持つ身近な人物を中心に登壇してもらい、聞き手に自分事として捉えてもらうために尖りすぎた内容ではなく日常の中の工夫や将来の展望、夢を語ってもらうというコンセプトで実施する。イベント外の情報発信としては学生による冊子の作成やSNSなどを活用した継続的な発信の実施を検討する。

参加者は高校生を中心に大学生も対象とし、学生の参加しやすさを考慮して11～12月の土日開催を検討する。また昨年度の反省を活かし、十分な広報による集客期間を確保するため登壇者が1、2名決定した時点で早急に周知を開始し、高校の生徒会やOB会等のネットワークも活用して50～60名程度の学生を集めることを目標とする。場所はアクセスを考慮し、コラッセふくしまやアクティブシニアセンター・アオウゼといった福島市内で検討する。

<主なご意見>

1) 学生・企業のニーズ、コンセプト

- ・ 高卒の学生は企画や広報といったホワイトカラーの業種を希望していても就職しづらく、結果的にブルーカラーの業種に就く学生が多い。
- ・ 県外就職をしたものミスマッチを理由に地元へ戻る原因としては、人間関係や想像と実際の仕事の差異、地元にいてほしい両親からのプレッシャーなどが挙げられる。
- ・ 県内高校生が高卒で就職して3年以内に辞める確率は4割というデータもあるが、早期離職者の再就職先となる受け皿の検討が必要ではないか。
- ・ 現状維持を目的とした行政にして、税金を投下することで受け皿を充実させすぎると、働いている側に稼ぐ意識が薄くなる上、外からは現状維持をよしとした環境に見え、上昇志向を持った人達から見て魅力を感じられない町になってしまうのではないか。
- ・ 最近は安定を志向する、努力をしたくないと考えている学生が非常に多い。
- ・ 成長を積極的に求めないというのは、学生の志向が問題である場合と地域や社会が手を差し伸べすぎている環境に起因する場合があるのではないか。
- ・ 県内就職を真剣に考えている高校生が対象であれば、あまり現実味のない夢を話したり上辺の格好良さだけを見せたりするよりも、日々の業務の工夫などを話す形でもよいのではないか。
- ・ 現状のみ話す人は聞いている側が魅力的に感じられない。現実的にこういったステップでやろうと思っている、というような今後のこと語れ、夢やその先の展開が見せられる人が適していると考える。
- ・ 仕事内容だけでなくライフヒストリーに魅力のある人がよいのではないか。
- ・ 聞き手が学生のため、自分事として考えてもらうためにも、分かりやすい実績を持つ人を選んで話が伝わるようにすることが重要である。

2) 参加者・登壇者像

- ・ 企業側がニーズとして向上心のある人材を求めているのであれば、学生にも向上心があつて活躍できている人を見せるべきである。

- ・ 尖った人による講演は昨年の「実践の場」で実施していることもあり、尖りすぎていると学生が自分事として捉えられないため、「自分でもできそうだけど多少の頑張りが必要」と学生が思うような人に登壇してもらえるのが良いのではないか。
- ・ 大学生が就職後にミスマッチを感じているという話もあったため、参加者は高校生だけでなく大学1、2年生も含めてターゲットとする想定でよいのではないか。
- ・ 理想は1ブースあたり聞き手が10人程度となるのが車座で話しやすい。合計で50～60人の参加者がいるとよいのではないか。昨年は高校生だけで4、5人、大学生含めて7、8人だった。

3) 魅力付けの方法

- ・ 昨年の「実践の場」の反省点として、集客時間が不足していたことが挙げられる。
- ・ 教育委員会に協力を依頼するという手段もよいと考える。昨年は周知を開始した時期が遅く間に合わなかつたが、早めに周知を始めれば教育委員会の協力を得ることも可能ではないか。
- ・ 自力で企業やイベントを探すなどして活動しているような学生だけでなく、震災を経験したことで深層意識に地域を思う気持ちを強く持ちながらも普通に生活しているような学生こそ呼びたい。広報だけでは参加が見込めない可能性が高いため、別の手段の併用を検討する必要がある。
- ・ 高校の同窓会のネットワークの活用もあり得るのではないか。首都圏の大学に通っている学生への周知の一助となるのではないか。
- ・ 生徒会の縦横のつながりが強いため、活用できるのではないか。
- ・ 「実践の場」単独の1回のみで学生の就職に直結するほどの成果を求めるることは難しいと考えるが、学生の現状として情報共有があつた通り、「実践の場」の取組をきっかけとして冊子づくりなど能動的・継続的なその後の活動につながれば探求学習の成果にもなるのではないか。
- ・ 探求学習など授業の一環として「実践の場」を開催するという手段はどうか。
- ・ 基本的には土日に授業と関係なく開催して、参加したい先生方がおられる場合は参加してもらい、もし授業で実施したいという学校があれば授業で取り入れてもらって構わないという手段が考えられる。
- ・ イベント外の情報発信方法としては、イベント後に学生が冊子を作成し、単に話を聞くだけでなく生産側に回らせるようにするのが良いのではないか。またSNSなどの活用も検討する。

4) 時期・場所

- ・ 参加者が学生であれば、土日のどちらかの開催がよいと考える。高校生は試験や模試の時期が学校によって異なるため、ある程度決め打ちする必要がある。時期としては 12 月の後半あるいは年明け頃が良いのではないか。
- ・ 昨年は登壇者が全員確定するのを待っていたため広報の開始が遅くなつたが、ある程度決定した時点で広報すれば年内の開催でも広報が間に合うのではないか。
- ・ 場所としては、昨年はコラッセふくしまで開催した。集客の観点を考慮すると福島市内が良いと考えるが、他の候補としては郡山か浜通りが挙げられるか。
- ・ 福島市内か郡山がアクセスを考えるとよいのではないか。
- ・ 福島市内の高校生のアクセスを考慮すると、アクティブシニアセンター・アオウゼも候補としてはよいのではないか。

6 閉会

本日の議論をもとに事務局が企画を詳細化し、登壇候補者のリストアップは各参加者団体に依頼する。「実践の場」や第 3 回意見交換会のスケジュールは追って連絡する。

以上